

国

語

[一] 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

稽古は「からだ」を重視する。肉体の訓練ではない。しかし精神修養でもない。では「からだ」とは何か。そして「身心一如^{しんしんいちにょ}」とは
 ということなのか。

本書が語る「からだ」は「自分のからだ」である。他人の身体ではない。人間一般の身体でもない。「自分がからだである」という
 ことを問題にする。

自分がからだである。からだに支えられて生きている。一見、当然に聞こえるこの事実が、しかし、しばしば忘れられている。^a西洋
 近代科学の理論地平では、この「からだ」の視点が、理解されにくいのである。

たとえば、医者が患者を診察する。その時、医者は患者という他人の身体を診ている。医者の語る身体は、診察の対象である。その
 ように、客体(対象)となった身体を、本書は「肉体」と呼ぶ。

それに対して、ここで考えたいのは、患者自身にとつての「からだ」である。歯が痛くてたまらない。その痛んでいる「からだ」を
 冷静に観察することなどできない。痛くて仕方がない、今まさに痛んでいる「生きられているからだ」である。そうした X が主
 題なのである。

ということとは、たとえ自分のからだであっても、自分で自分を観察する場合は、「からだ」とは言わない。それは「肉体」である。
 そして、観察しているのは、からだを忘れた観察主体である。観察の対象となった肉体(客体object)を、からだから離れた自分(身
 体性をもたない主観subject)が観察している。

「からだ」は対象にならない。見ることができない。ところが、他方で、見る主観でもない。「からだ」は、対象objectでもないが、
 主観subjectでもない。そうした地平(主客二元論的な地平)とは異なる位相の出来事なのである。

からだは生きることができただけである。一人称として体験されるだけである。
 ① 「自分^①はからだである」という当たり前のことを、あらためて言葉で語ると、これほど奇妙な表現になるといふまさにその事実が、
 ステ^②にこの問題の困難を物語っている。「自分はからだである」と、あらためて自覚することは、私たちの自己理解に大きなヘンヨウ^②
 をもたらす出来事なのである。

試しにもう一度、場面を換えて考え直してみる。今度は、鉄棒の逆上がり^aを練習する子どもと、それを指導する教師である。教師の

視点から見ると「腰あしの動き」に問題がある。しかしそこで語られる「腰の動き」は、観察された他人の「肉体」の動きである。

それに対して、子ども本人には「腰の動き」が見えない。その子は自分の腰を対象として観察することなどできずに、(奇妙な表現だが)腰を生きている。惨めさや悔しさとともに、なぜできないのか分からないまま、上手に持ち上がらない自分のからだを生きている。そうした「からだである自分」が、稽古の思想が語る「からだ」なのである。

あらためて用語を整理しておく。「肉体」とは、観察の対象となった身体である。人は肉体を観察することは出来るが、肉体を生きたことは出来ない。それに対して、「からだ」は観察できない。「自分がからだである」という意味で、からだを生きたことが出来るだけである。からだは、対象となったとたん、肉体になってしまふ。そして、「身体」という言葉は、「肉体」と「からだ」を含めた、より一般的な意味で用いることにする。

^b稽古は「からだ」で行う。からだの動作の反復が、稽古の基本である。そして稽古が進むと、考えなくても、からだは自然に動くようになる。

しかし「からだは自然に動く」とは、自動運動とは違う。オートマチックな条件反射でもなければ、マニュアル通りの③ダセイ的な繰り返しでもない。確かに、実際の稽古の場面においては、ダセイ的な反復や条件反射的な自動運動になることが多い(そして面白くないと語られる)。しかし、本来稽古が追求している「からだの自然な動き」は、それとは違う。そうした自動運動に留とどまることcがない潜在性を秘めている。

「肉体」と「からだ」の違いで言えば、自動運動が「肉体」の動きであるのに対して、稽古が追求する動きは「からだ」の動きである。「肉体」は意識と対立する。そして意識は肉体を操作しようとする。初心者ピアノを弾く場合、指の動きを意識し、間違わぬよう指を操作する。意識が肉体(指)を操作しようとする。そして、肉体(指)が意識の期待に④ソソわない場合、思い通りに弾くことができないと嘆く。つまり、稽古は(最初のうちは)、意識によって肉体をコントロールし、意のままに、肉体が動くことを目指していることになる。

それに対して、「からだ」は、意識と一体である。名人は、自分の指の動きなど意識しない。名人はからだで弾く。頭で考え指を動かすのではなく、名人はからだであり、からだは弾く。あるいは、からだ(指)が音楽の調べに乗って舞う。

状況を頭で判断するのではなく、状況の中にいるからだは、その時その場に最もふさわしく、周囲と響き合う。その時その場に応じて、そのつど、新しく動き始めるといふことである。

それは、スキルに頼ってはいてはできないが、スキルなしでもできない。スキルを身に付けたからだが、スキルに縛られることなく自由になる時に初めて可能となる。

そう考えてみれば、その「自由な動き」とは好き勝手な動きではないことになる。自分一人が動きたいように動くのではない。周囲の人やその場の状況のなかで、その時その場にふさわしい仕方でも動く。

それを、「からだは自然に動く」という。稽古はそうした「からだ」を求め、型は、そうした「からだ」の土台なのである。

稽古が目指す舞台（試合）は予測不能なハプニングに満ちている。スキルやマニュアルが通用しない。では、ハプニングに「備える」ためにはどうすればよいか。

予測できないのであれば準備のしようがない。想定外の事態に対して「備える」という言葉は相応しくないのだが、「型」の知恵は、ハプニングに対応する身体を育てようとする。不測の事態においては、その時その場に即して、自在に自分を変えてゆかねばならない。そうした可能性に開かれた身体を育てる知恵が「型」である。型は、ある種の「即興性」を可能にする身体の土台なのである。

「型」という言葉を聴くと、多くの学生は、固く締め付けられた窮屈な枠を連想する。「型に従う」とか「型に縛られた」という言葉の通り、自由な動きを制約する、例えば「鑄型」のような、枠組みである。

ところが、同じ「型」という言葉が、ある場面においては、創造性の土台を意味する。型があるから即興性が可能となり、型が土台となつて初めて自在な動きが可能になる。自由でしなやかな動きを根底で支える「基礎・基本・土台」。

それは、型の習得プロセスを、二つの異なる場面に分けて考えてみれば、理解しやすくなる。

まず、型を習い始める場面である。子どもが型を習う時、型は、外在的な規範として、子どもを固く締め付ける。型は子どもの内側からは出てこない。外から（大人から・伝統から）、決まり事として、教え込まれる。型は、子どもの自然な身のこなしの延長上に、自然発生的に成り立つのではなくて、その道を進むためには、ともかく習得しておかねばならない規則なのである。

ところが、そのように「押し付けられた規則」に留まっている限り、子どもが型を身に付けたことにはならない。「型が身に付く」とは、もはや、押し付けられた規則ではなくること。何度も繰り返し返すことによって、型が、自分のからだの自然な動きとなり、その動きが自らの内側から自然に生じるように感じられる、ということ。意識されなくなつて初めて「型が身に付いた」と語られる。

さて、そのように「型が身に付いた」時、その型は、自然な動きを押しとどめない。むしろ動きを促す。より広がりのある動きを促

し、より多様な展開を可能にする。

あるいは、型が身に付いた場合、内側から湧き起る勢いに「のる」ことができる。逆に、型がない場合は、身体から湧き起る勢いに振り回されてしまい、その奔放な勢いを生かすことができない。

型が身に付くとラクになり、型を意識することがなくなる。「練習は覚えるためにするが、稽古は忘れるためにする」と言われるのは、そういうことである。型は、身体の内側から湧き起る勢いに「のる」ための、最も合理的な「からだの理」である。その道の先人たちの知恵の結晶なのである。

ところが、「型に縛られる」という事態が生じる。型が新たな展開にとっては窮屈になる。言い換えれば、今までの型には納まり切らない動きが、内側に育ってきたということである。それまで型によって支えられてきた動きが、それ以上の展開を始め、もはや型の中に納まり切らなくなる時、型が窮屈になり、「型に縛られる」と感じられる。

そこで「型から離れる」という事態を迎える。もはや型に縛られることなく、型から離れ、より自在な境地に進む。ということは、この場合も、型の習得が最終目的ではなかったことになる。型は、その型を超えてゆく可能性を内に秘めて、習得されるのである。

さて、こう理解してみれば、型がなぜ「ハプニングに対応する身体を育てる」知恵であったか少しは見えてくる。型は、からだの内側の動きを促すための土台であり、その道の先人たちが様々な経験を重ねる中で最も基本とした「からだの流れ」である。ハプニングに対応するためには、その型を原点として、そこから動き始めるのがよい。

しかもその型は、新たな動きを開始してゆくためのゼロ地点であるから、動きが混乱する時、そのつど立ち戻るべき原点でもある。あるいはそこから出発することが、最も創造性を豊かに広げる。そうした意味において、「型」は、(その「道」における)最も合理的な「からだの理」と理解されるのである。

(西平 直『稽古の思想』による。問題作成上、一部改変したところがある)

問一 波線①～④にあてる漢字のうちの一字を含む語を、次の傍線を引いた語の中から一つずつ選び、解答欄の番号をマークしなさい。

①スデに 解答番号は 。

- 1 公正であることをテツソクとする
- 2 あの人はソクブツテキな見方をする
- 3 キセイの観念にとられる必要はない
- 4 必ずやり遂げるといふキガイを持つ
- 5 これは会社のキテイに反することだ

②ヘンヨウ 解答番号は 。

- 1 その功績をシヨウヨウする
- 2 諸国ヘンレキの旅をする
- 3 シヨウヨウたる態度で対応する
- 4 縄文土器のハヘンを見つけた
- 5 全員がイチヨウに頭をさげた

③ダセイ 解答番号は 。

- 1 無駄にダミンを貪る
- 2 誰もがダキすべき行為だと思った
- 3 どうしてもダサンが働いてしまう
- 4 あの人はキセイの天才と言われている
- 5 芸能界を引退しシセイの人として生きる

④ソわない 解答番号は 。

- 1 エンギをかつぐ
- 2 会社のエンカクを調べる
- 3 交渉がエンカツに運んだ
- 4 テンプの才能を持っている
- 5 大統領のソツキンになる

問二 波線⑤「腰」の語を用いた次の五つの成句について、それぞれの意味の組み合わせとして最も適当なものを、後から一つ選び、解答欄の番号をマークしなさい。解答番号は 5。

	腰が低い	腰を上げる	腰を折る	腰を据える	腰を抜かす
1	遠慮	開始	障害	鈍重	動揺
2	卑屈	向上	支障	悠然	恐怖
3	身軽	着手	失望	地道	豪快
4	謙虚	実行	妨害	沈着	仰天
5	安定	行動	干渉	泰然	秀逸

問三 X にあてはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選び、解答欄の番号をマークしなさい。解答番号は 6。

1 「人間の身体」
 2 「自分の肉体」
 3 「客体であるからだ」
 4 「からだである自分」
 5 「観察できるからだ」

問四 傍線 a 「西洋近代科学の理論地平」とあるが、これはどのようなことを指しているか。最も適当なものを、次の中から一つ選び、

解答欄の番号をマークしなさい。解答番号は 7。

- 1 医学のような高度な専門的分野での考え方。
- 2 からだを観察の対象や、観察する主体に分けて扱う考え方。
- 3 からだを肉体と身体とに二分する考え方。
- 4 からだを見るからだと見られるからだとしめない考え方。
- 5 「生きられているからだ」という捉え方を支持する考え方。

問五 傍線 b 「稽古は『からだ』で行う」とは、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、解答欄の

番号をマークしなさい。解答番号は 8。

- 1 稽古は、意識によって操作されるのではなく、意識を自在に操作できる「からだ」の形成を目指しているということ。
- 2 稽古は、「自分是从からだである」と自覚することによって、状況判断を頭でしないことを目指しているということ。
- 3 稽古は、型が創造性の土台であるということを、「からだ」で具現化することを目指しているということ。
- 4 稽古は、ハプニングに対応できるだけでなく、ハプニングを予測できる「からだ」を作ることも目指しているということ。
- 5 稽古は、状況を頭で判断して動くのではなく、意識と一体である「からだ」が自然に動くことを目指しているということ。

問六 傍線c「そうした自動運動に留まることがない潜在性」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、解答欄の番号をマークしなさい。解答番号は 9。

- 1 その時その場にに応じて、最もふさわしい仕方です新しく動き始める可能性。
- 2 スキルを身に付けなくても、その状況に応じた最も適切な動きができる可能性。
- 3 肉体と意識を支配し、意識を自由に操ることができる可能性。
- 4 自分の実力に応じて、その場に最もふさわしいと思われる動きを見つけ出す可能性。
- 5 習慣的な反復や条件反射的な運動を、自然な動きであるかのように見せる可能性。

問七 傍線d「最も合理的な『からだの理』である」とあるが、型についてこのように言えるのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、解答欄の番号をマークしなさい。解答番号は 10。

- 1 その道の先人たちが最も重要な基本とした「からだの流れ」である型は、それに縛られるのを避けることで、次の「からだは自然に動く」段階へと進ませ、予測不能な事態にも対応できる、独自の動きを獲得させるものであるから。
- 2 子どもの自然な身のこなしを理想とした、その道の先人たちの経験が詰まった型は、それが自分のからだの自然の動きとなり、自分の内側から湧き起こる勢いになることで、想定外の事態に対応できる身体を作る基盤となるから。
- 3 型は、その道の先人たちが経験の中で最も基本とした動きであり、習い始めた当初は外在的な規範として働くものの、やがて予測できない事態に陥った際には、最も創造的な動きを生み出すための土台となるものだから。
- 4 様々な経験を通じてからだの動きを熟知したその道の先人たちのように、型が持っている「縛られる」ことと「離れる」ことと、いう二つの性質に熟知するのが、ハプニングに対応できる「即興性」を身に付けることにつながるから。
- 5 「肉体」は意識に支配されていると知ったその道の先人たちは、「肉体」から意識を排除することによって、「自然に動くからだ」を作ろうとしたのであるから、型こそが、「自然に動くからだ」を作ることの出発点になるから。

問八 傍線e「型は、その型を超えてゆく可能性を内に秘めて、習得されるのである」とあるが、これはどのようなことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、解答欄の番号をマークしなさい。解答番号は 11。

- 1 型は、始めのうちは押し付けられ、縛られていると感じられるものであるが、繰り返し返すことで身に付いてゆき、それから離れる段階になると、意識しなくても自分らしい動きが自在にできるようになるものであるということ。
- 2 からだがこれまで身に付けた型以上の展開をし始め、その型が窮屈になったときには、そこから離れてより自在な境地へと進展していくという性質を、型はもともと備えているということ。
- 3 稽古を繰り返し返すことによつて、型の動きが自らの内側から自然に生まれるように感じられるに至ったときにはじめて、型が、自然な身のこなしの延長上に自然発生的に成立したものであるといえるようになるということ。
- 4 型を身に付け、不測の事態にも自然に動ける即興性のあるからだになつたとしても、不測の事態に対応しているうちにその型で身に付けた即興性では対応できなくなり、違う型をまた習得しなければならなくなるということ。
- 5 「からだが自然に動く」ことを目指すにあつて土台となる型であるが、個人差があるからだの動きに対応するために、ある段階に来たところで、型は土台となる性格を変えざるを得ないものであるということ。

問九 本文に述べられていることの説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、解答欄の番号をマークしなさい。解答番号は12。

- 1 稽古が重視する「からだ」というものが西洋近代科学の理論地平では理解されにくいことを明らかにすることによって、西洋近代科学の弱点を指摘するとともに稽古において「身体」を「肉体」と捉えることの弊害を述べている。
- 2 筆者は、稽古において「身体」を「肉体」と「からだ」に分けて捉えることの重要性を述べているが、この捉え方は広く運動一般においてスキルを上達させるためにも有効であると考えている。
- 3 稽古は「一人称として体験されるだけである」とし、「からだ」を重視することを述べることで、稽古は個人の身体の変化を目指すものであり、それゆえ、稽古は「個」を尊重するという稽古の思想を述べている。
- 4 「稽古は忘れるためにする」とは、「型に縛られる」「型から離れる」という「型」の持つ二面性を意識しなくなることによって、より自在な新たな境地へと進むことができるようになることを意味している。
- 5 「からだ」と「肉体」を対比させることで、稽古の求めるものが、意識によって身体を自由に操作することではなく、意識と一つになった「からだ」の自然な動きにあることを明確化している。

〔二〕 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

セントラル・パークの木々が、少しずつ黄金色に変わりつつある秋晴れの土曜日。私は、メトロポリタン美術館へやってきた。セントラル・パークの森を背景にそびえたつMETは、アメリカを代表する美術館であり、とても一日では回れないほどの壮大なスケールが特徴だ。

五年ぶりの訪問だった。前は、珠子さんと一緒に来た。彼女の手を引いて、METの正面入り口へと続く大階段を、一段一段、踏みしめるように上がっていったことを、ついきのうの出来事のように思い出す。

けれど、あれから、もう五年も経ったのだ。——つまり、タマコさんが他界してから、五年経った、ということなのだ。タマコさんは、私の祖母だった人だ。

祖母であるのみならず、母であり、親友であり、恩師であった人。すっごくカッコいい女。元祖「飛んでる女」、って死語だけど。……いまだったら「イケてる女」とでもいうのだろうか。

戦後生まれのタマコさんは、都内有数の医大を卒業したエリート「女医」だった。専門は小児科。「女医、っていわゆるのが死ぬほどこいだった」と、突っ張り続けていたらしい。だけど白衣姿の自分が結構好きで、昼休みにも白衣を翻してキャンパスをさっそうと歩いていたとか。「実はけっこうナルシストだったのよね」と笑っていた。

二十四歳のとき、大学の同窓生だった私の祖父と結婚。ひとり娘を授かった。私の母である。母が中学生のときに、祖父は病気で他界した。

「典型的な医者の不養生だったなあ。好きにさせてた私のせいもあったかな」と、祖父の顔を知らない私に向かって、反省のベン。

母も医大に進み、小児科医になった。タマコさん同様、二十四歳のとき、大学の同窓生だった父と結婚。一粒種の私が生れたが、今度は「医者の不養生」ではなく「あまりにも殺伐とした夫婦生活」がもとで早々に離婚。三歳児の私を連れて、実家に戻った。タマコさんは「もう一回娘を育てるチャンス到来」と、小躍りして喜んだという。

「お母さんがふたりっていうのもなんだから、私のことはタマコさんって呼ばせるからね」
おばあちゃん、と呼ばせないためには幼児のうちから刷り込みが必要。

「ねえ吾美ちゃん、あなたにはママがふたり、いるのよ。若いママと、年上のママ。若いママは『ママ』でいいから、年上のママのことは『タマコさん』って呼んでちょうだいね」

ふたりのママに愛情いっぱい育てられた私は、「祖母母娘三代ドクター」となるべく医大へ進むつもりで勉強に励んだ。ところが進路を決める際に、タマコさんがねじこんできたのが「どうせならバイリンガルのドクターになれ」との指令。

「だってふつうに三代美人ドクターなんてつまらないでしょ」

いや、ふつうじゃないと思うけど……それに「美人」ってなに？

「ねえアミ、あなた英語すつごく得意だし、絶対いけるわよ。小児科医もいいけど、アメリカでばりつばりの心臓外科医とかになって、どかーんとお金儲けして、ママとタマコさんに楽しさせてくれない？」

うーん心臓外科医かあ、ぴんとこないなあ……と思いつつ、ママとタマコさんを楽させるってのはいいかも、と孝行娘はその気になった。

「いきなりは無理だろうから、まずは国内の大学の医学部に進んで、そこから大学院を狙いなさい」

と、これまたタマコさんより指令が飛ぶ。そして彼女のシナリオ通りに、結果的にコロンビア大学医学部の大学院に進学を果たした。……と言うのは簡単だけど、いやもう、ほんと、血のにじむような努力。目一杯やった。大変だった。だけど、ほんとうに、あのときがんばってよかった、と思っている。

留学中の二年間は、タマコさんの大学時代の朋友、マサエさん——アメリカ人のご主人、アーサーともども開業医をしている——のアパートにイソウロウさせていただいた。

ホームシックになるかなあ、と思いきや、すぐに友だちもできたし、なによりマサエさんが「私は『ニューヨークのタマコ』だからね」と、タマコさんになり代わって、それはそれはよくしてくれた。子供のいない夫婦は、まるで突然、娘——孫でなくあくまでも娘。そういうところ、マサエさんもタマコさん同様突っ張っていた——ができたみたいだと、私をかわいがってくれたのだ。

休みのたびにタマコさんと母が、順番に、ときには一緒に遊びにきた。マサエさんとアーサーも加わって、ブロードウェイを観たり、ジャズハウスに行ったり、ロングアイランドやボストンへ足を延ばしたり……。

いちばん楽しかったのは美術館巡り。タマコさんはアートが大好きで、「医者にならなかつたら学芸員になりたかったわ」と、つくづく。

「いっつもそうぼやいていたわよね」とマサエさん。

タマコさんは、ため息をつきながら、

「美術館にいただけで、気持ちが悪らぐの。あーあ、いまからでもキユレーターになりたい。学芸員の資格、取ろうかな」
なんて言っつて、冗談なのか本気なのか、でもタマコさんならほんとにやっちゃいそうだな、という気がした。

大学院を卒業後、タマコさんと母が開業している小児科医院に、外科をくつつけるかたちで、私も仲間入りした。「英語が話せるドクター」ということで、外国人の患者が数多くやってくる。バリバリの心臓外科医にはなれなかつたけど、やっぱり私は、タマコさんとママの近くにいたい、と思った。そして、タマコさんのように、誇りと笑いをもって仕事をしていきたい。「笑いは余計でしょ」と、タマコさんはやっぱり笑って私を受け入れてくれたのだった。

子供たちにも親御さんにも慕われて、いつも楽しそうに笑って、堂々と、飄々として、カッコよくて、私の憧れだったタマコさん。

「医者の不養生」で病に倒れ、それでも最後の最後まで、笑顔を絶やさずに、「ドクターストップがかかるまで」診察を続けた。——
ストップをかけたドクター、それはタマコさん自身だった。

「死ぬまえにもう一回だけニューヨークに行きたい」とコンガンされて、母と私は「いいかげんにして」「絶対ムリ」と猛反対したのだが、

「医者が三人もいるんだから大丈夫。……いや違う、むこうにいけば、マサエとアーサーがいるから五人よ！」

と聞き直る始末。 A 自分も医者側にカウントしていた。

「まったくもう、患者としての自覚ゼロよね」と母は泣き笑い。結局、三人でマンハッタンを訪れることになった。

宿泊先は、もちろんマサエさんのアパート。私たちの心配をよそに、タマコさんはびっくりするくらい元気だ、マサエさんが「病氣なんて嘘でしょ？」と私に耳打ちするくらいだった。

帰国の日。アパートの出入り口まで見送りに出たマサエさんと、タマコさんは、固く固くハグし合った。

「また会おうね」とマサエさんが言うのと、

「天国だね。ひと足先に待ってるわ」とタマコさんが笑った。

「もう、冗談やめてよ！」と、マサエさんは本気で怒った。みるみるうちに顔がくしゃくしゃになり、泣き出してしまった。その背中を、ぼん・ぼん・ぼん、タマコさんはやさしく叩きながら、

「おお、おお。私のかわいいマサエ、昔っから泣き虫なのよね、このお嬢ちゃんは。泣かない、泣かない。かわいいマサエ。大好きな、大好きな私のお友だち」

歌うようにタマコさんが言った。それでいつそう、マサエさんは、わんわん声を上げて泣いてしまった。母も私も、つられて泣き出した。旅のあいだじゅう、ずっと、ずうつとがまんしていた涙が、ぜんぶ、流れて、きれいさっぱり落ちた。

最後の日々は、自宅で過ごした。ベッドサイドの壁に大好きな画家のポスターを飾り、お気に入りのイッセイミヤケのワンピースを着て、毎日ちゃんとお化粧もして。バラの香りのオー・ド・パルフラムも忘れずにふりかけて。母の手料理を食べて、シヨパンのピアニ集やユーミンのベストアルバムを聴いて。

すっかり痩せてしまっても、投薬のせいで髪の毛が薄くなっても、タマコさん、すてきだった。ほんとうに、すつごく、すつごくすてきで、きれいだった。

そうして、とうとう、そのときがきた。

すつかり痩せ細った、だけど可愛いかわいネイルアートをしたタマコさんの手を握って、私は涙が止まらなかつた。ところが、そんな私に向かつて、タマコさんときたら、

「アミちゃん……泣き顔、ブサイク……」

と、のたまった。そして、最後の告白。

「あのねえ。私、ずっと隠してたけど……学芸員の資格、取ったのよ」

すうつと深呼吸をひとつして、私の大好きな祖母は、天国へと旅立った。

J・F・ケネディ国際空港からイエロー・キャブに乗り、マンハッタンのミッドタウンにあるマサエさんのアパートに到着した。

学生時代の甘くてしょっぱい思い出が、ぎゅつと詰まったなつかしい場所。築百年くらいは軽く経っている典型的なマンハッタンスタイルの低層ビル。一階にはブティックが入っていて、二階、三階にはオフィスが入居している。私の下宿先、つまりマサエさんとアーサーの住居は、このビルの四階にある。

ドアが開いたとたん、

「おかえり、アミちゃん！」

いきなり抱きすくめられた。マサエさんは、

B

、バラの香りがして、あ、タマコさんとおなじ匂い、と胸がきゅんとした。

「ひさしぶりね、元気だった？ ママは？ 元気？ 仕事はどう？ ボーイフレンドはできたの？ ランチは？ お腹空いた？ どつか食べにいく？」

矢継ぎ早に質問攻めにされた。

「ちょっと待ってよ、いっぺんに答えられないし」と苦笑すると、

「ああ、それもそうだね。つい、うれしくって」とマサエさんも照れくさそうに笑った。

——アミちゃん、近々こっちへ遊びにきませんか。

マサエさんからメールがきたのは、ひと月まえのことだった。

お互い忙しくしていて、しばらくやりとりが途絶えていたのだが、何か急に思い出したように連絡をくれたのだった。

——タマコさんが天国へ逝ってしまっただけから、もうすぐ五年になりますね。あなたが送ってくれた、自室で過ごすタマコさんの画像……亡くなる一週間まえに撮った写真を、今日、なつかしく眺めていたら、あ、気がついたことがあるの。

タマコさんの背後、ベッド脇の壁に貼ってあるポスター。ジョルジョ・モランディだ！ って。

ちょうど今月から、メトロポリタン美術館でモランディの展覧会があります。

よかったら、見にこない？

メールには、展覧会のURLが貼り付けてあった。ひと目見て、「あ、確かに」と私はひとりごちた。

グレーや生成り色の無地の背景に、ひっそりと並ぶ細長い花瓶や壺や水差し。とても静謐な画面。声高ではないけれども囁くような主張がある——そういう静物画。モランディは、繰り返し、似たモチーフの静物画を生涯にわたって描き続けた画家のようだ。

タマコさんは、最後の日々を過ごした自室に、モランディのポスターを飾っていた。横長の画面に、水の入ったガラスの水差しと、フルートグラス、ボウル、パンとナイフ。——なんとということもない静物画。

タマコさんの部屋にいるとき、私はタマコさんのことしか目に入らなくて、ポスターは視界に入っただけで、そういえば「この画家は誰？」などと訊くこともなかったのだ。

毎日眺める作品として選んだのだから、きつと、とても好きな画家だったに違いない。生きていれば、展覧会絶対に観にいく！ と言いつ張ったことだろう。

——観にいけます。タマコさんの代わりに。

マサエさんにそう返事をして、私は、五年ぶりにニューヨークへやってきたのだった。

マサエさんと私は、地下鉄に乗って、さっそくメトロポリタン美術館へと出かけていった。

道中、私は、マサエさんの質問に全部答えた。ママはすこぶる元気で、今回一緒に来られないことをとても残念がっている。仕事はあいかわらず忙しいが、充実している。あいにくボーイフレンドには恵まれず、でもまあ気長に構えてそのうちに誰かいい人に出会えれば、と思っている。ランチはまだなので、お腹はちよつとだけ空いたけど、まずは展覧会を見て、そのあと美術館のカフェでサンドイッチプレートなんかいいな。

マサエさんは、終始にこにこ顔で、私の話のいちいちに、うんうん、そうだね、そうだよね、と相づちを打った。私が下宿していた頃には髪を染めていたけど、いまではすっかり白髪にして、でもそれがすんなりとした細面に似合っていた。

「このまえみんなでここに来たときは、九月だったね。暑い夏がようやく終わって、空気がひんやりしてきたの、覚えてるわ」
メトロポリタン美術館の入り口前の階段を、一段一段、ふみしめて上りながら、マサエさんがつぶやいた。

「そうだったね。美術館から出てきて、この階段に座ってひと休みして……」

私が言うと、マサエさんは、微笑してうなずいた。

——そう、あのときは。

あのときは、タマコさんが一緒にいたんだ。

ふと、タマコさんの手を引いて階段を上がったことを思い出した。よいしょ、よいしょと私が自然と声をかけたら、やあねえ、年寄り扱いしないで、とタマコさんが言ったつげ。

ちようど週末の午後ということもあり、美術館のロビーは多くの人々でごったがえしていた。チケットを買うと、私たちは、すばらしいコレクションの数々には目もくれず、いちもくさんに「ジョルジョ・モランデイ展」を開催しているギャラリーを目指した。

広大なMETの館内では、特別展の会場がどこにあるのか探すのも一苦労なのだが、「モランデイ展」のサインに導かれて、ときどき監視員に行き方を尋ねながら、私たちは特別展示ギャラリーに行き着いた。どんなにか来場者が詰めかけていることかと思いきや、意外にも人はまばらだった。

タマコさんの最期に寄り添った画家——モランディ。

事前に、ネットで調べておいた。C 初歩的な情報だけだが。

ジョルジョ・モランディ、一八九〇年イタリア・ボローニャ生まれ。ボローニャの美術学校で学んだのち、イタリア国内をわずかに旅した以外は、生涯を通してほとんど故郷の町から出ることはなかった。生涯独身で、三人の妹が彼の身の回りの世話をした。小振りのカンヴァスに、水差し、花瓶、筒、コップなどを淡々と並べた作品を描き、その作風を変えることはなかった。いかなる流派にも属さない独自の表現とモダニティが高く評価され、孤高の画家としていまなお多くのファンに支持されている。

マサエさんと私は、それぞれに、モランディの作品を順番に見て歩いた。一点一点、注意深く、そして自由に気持ち解放して、作品に向かい合った。

とても、地味な絵だ。特徴がないといえばいい。小さくまとまった花瓶や水差し。平坦な画面。淡くて単調な色。けれど、とてもなく個性的だと認めざるを得ない。なぜって、こんなふうには、繰り返し繰り返し、飽き飽きするほど、同じモチーフと同じ構図を描き続けた画家は、きつといないんじゃないか。

そこには、バラの花も、山も海も川も、お城も瀟洒な部屋も、聖人も美人も、ドラマも物語もない。ただただ、取るに足りないささやかなものたちが「在る」だけだ。

けれどこうして、繰り返し繰り返し、似たような、ちよつとずつどこかが違う静物画を眺めるうちに、私は次第に圧倒されていった。それは、とても心地のよい感覚だった。いつまでも、ずっと、モランディの描いた静物の森の中を、宇宙を、さまよっていたい気持ちになった。

マサエさんが、ある作品の前で足を止めた。私も、そのすぐ後ろで立ち止まった。

——ブリオツシュのある静物、一九二〇年。

「これだったわね」と、マサエさんが囁いた。私のほうへ振り向いて。

「うん。これだった」と、私は囁き返した。

その作品こそが、タマコさんの最期に寄り添った一点だった。

横長の生成り色の画面に、水の入ったガラスの水差しと、フルートグラス、ボウル、パンとナイフ。X

けれど、ひたむきで、しみじみとうつくしい絵。

タマコさんは、いつも元気いっぱい、にぎやかで、颯爽とカッコいい人だった。言ってみれば、この絵の醸し出す雰囲気とは真逆のイメージ。だけど、この絵は、不思議なくらい、タマコさんそのもの——だった。

「二〇年制作か。もう一〇〇年近くまえだね。なのに、新しい感じ。いい絵だなあ。いまさらだけど……」

私はつぶやいた。そして、タマコさんの部屋に掛かっていたポスターには、実は全然関心を寄せなかったんだけど、と、マサエさんに正直に告白した。

マサエさんは、ひよっこりと肩をすくめた。

「だからじゃない？」

私は、首をかしげた。

「何が？」

「だから、あなた、わざわざここまで来たんじゃない？ いったいモランデイの何がそんなにタマコちゃんを引きつけたのか、確認しにきたんでしょ？」

でもって、タマコちゃんが私のところにあなたを差し向けてくれたんだわ、たまにはマサエに会いにいきなさいって。

そんなふうの小声で言って、マサエさんは、うふふ、と笑った。

METを後にして、私たちが真っ先に向かったのは、マディソン街にあるおいしいと評判のベーカリーカフェだった。

モランデイを見ているうちに、なんだかお腹が空いてきてしょうがなかった。マサエさんも同じと見えて、展覧会場を出たとたん、

「ねえ、ブリオッシュ食べたいね」と。

窓辺のテーブル席に陣取った私たちは、オープンから出てきたばかりの熱々のブリオッシュにバターをつけて、頬張った。沁みるほど、しみじみとおいしかった。

そういえばタマコさん、密かに学芸員の資格を取っていたらしいよと私が教えると、マサエさんは目を丸くしていた。それが最期の言葉だったと聞いて、ますます驚いていた。そして、まったくもう、タマコちゃんたら……と、ほんのり涙ぐんで、笑っていた。

(原田マハ「ブリオッシュのある静物」による。問題作成上、一部改変したところがある)

* キュレーター＝博物館、美術館などの展覧会の企画、構成、運営などをつかさどる専門職である学芸員。海外のキュレーターの仕事の範囲と権限は日本の学芸員よりも幅広い。

問一 波線①～③にあてはる漢字のうちの一字を含む語を、次の傍線を引いた語の中から一つずつ選び、解答欄の番号をマークしなさい。

①ベン 解答番号は 13。

- 1 ベンギを図ってもらう
- 2 母にベントウを作ってもらう
- 3 彼女はキンベンで真面目だ
- 4 ナンベン聞いても覚えられない
- 5 ニンベンの漢字を練習した

②イソウロウ 解答番号は 14。

- 1 保護者とソウダンしてから決める
- 2 本文をここにソウニユウする
- 3 キコウ変動のニュースを見る
- 4 雑誌に文章をキコウする
- 5 ケンイが失墜する

③コンガン 解答番号は 15。

- 1 不毛な土地をカイコンする
- 2 ツウコンの失敗から学びを得た
- 3 彼とは非常にコナイな間柄だ
- 4 ガンチクある話を聞かせてもらった
- 5 ガンジヨウな建物を作る

問二 波線②、③の本文中の意味として最も適当なものを、次の中から一つずつ選び、解答欄の番号をマークしなさい。

② 医者の不養生 解答番号は 16。

- 1 適切な処置をすべき医者が、でしゃばって不必要なことをすること
- 2 人に健康を勧める医者が、自身の健康に気をつけないこと
- 3 未熟な医者が、自分の能力を実際よりも高く評価すること
- 4 仕事に熱心な医者が、飲食を慎んで自身の健康に留意すること
- 5 優秀な医者が、少しの不注意で誤った結果を招くこと

③ 殺伐 解答番号は 17。

- 1 気持ち食いが食い違ってぎくしゃくしていること
- 2 不運なことに見舞われて悲しんでいること
- 3 ライバル心が強くないがみ合っていること
- 4 さんでいてあたたかみの感じられないこと
- 5 恐れのためからだが震えること

問三 A C にあてはまる語句の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、解答欄の番号をマークしなさい。

解答番号は 18。

- | | | | | | | |
|---|---|-------|---|-------|---|------|
| 1 | A | ちゃっかり | B | ほんのり | C | ごく |
| 2 | A | すぐに | B | すつきりと | C | やっと |
| 3 | A | 自然に | B | やんわり | C | きわめて |
| 4 | A | うっかり | B | もやもやと | C | 非常に |
| 5 | A | 平然と | B | ほのかに | C | だんだん |

問四 傍線 a 「ずっと、ずうっとがまんしていた涙が、ぜんぶ、流れて、きれいさっぱり落ちた」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、解答欄の番号をマークしなさい。解答番号は 19。

- 1 タマコさんの笑えない冗談に付き合っていたが、「天国」の単語が出たことで無理やり笑うのを諦め、本気で心配しているマサエさんの姿にならうように感情のままに涙を流し続けたということ。
- 2 自分たちの猛反対を押し切ったタマコさんに振り回されながら旅行に付き合っていたが、タマコさんの歌うような発言を聞いて、これまでの彼女への接し方を反省し、泣きながら悔やんだということ。
- 3 タマコさんの最後の夢をかなえてやるための旅行だったが、マサエさんの子どものような号泣を見て、タマコさんの死が近づいていることが思い起こされ、涙があふれて止まらなかったということ。
- 4 これがタマコさんとの最後の旅行であるため、悲しさを見せないようにしていたが、泣き声を上げるマサエさんを目の当たりにし、こらえていた悲しみを涙とともに出し尽くしたということ。
- 5 自分たちの前では気丈に振る舞っていたタマコさんの口から出た死をイメージさせる発言に、これまでの様子との落差を感じて落ち込み、一気に悲しみに襲われて涙があふれたということ。

問五 傍線b「照れくさそうに笑った」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、解答欄の番号をマークしなさい。解答番号は 20。

- 1 五年前に娘同然のアミに泣き顔を見せてしまったことを忘れられずにおり、久しぶりの再会と相まって恥ずかしくなっているから。
- 2 久々に会えた喜びから挨拶も早々にアミに次々と質問してしまい、そのことをアミ自身に指摘されて気恥ずかしさを感じているから。
- 3 もう子どもではないアミをいきなり抱きすくめてしまい、数年ぶりに会う人に対して失礼なふるまいであったと反省しているから。
- 4 遊びにこないかと気軽に誘ってみたものの、久しぶりに会うアミに実は緊張していることを悟られないようにしているから。
- 5 気になることを一気にアミに続けざまに尋ねてしまい、年甲斐もなくはしゃいでしまった自分を情けなく思っているから。

問六 傍線c「ひと目見て、『あ、確かに』と私はひとりごちた」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、解答欄の番号をマークしなさい。解答番号は 21。

- 1 貼り付けてあった展覧会のURLから、モランデイがどういう画家だったかを知り、タマコさんの部屋に貼るにふさわしい絵であったと一人で納得したということ。
- 2 タマコさんたちと以前行ったメトロポリタン美術館が、モランデイの作品を積極的に収集していたことをやっと思い出したということ。
- 3 マサエさんのメールで、タマコさんがモランデイの作品を好きだったということを出せたとひとりごとを言ったということ。
- 4 タマコさんが生きていれば、モランデイの展覧会を絶対観に行くといい張っただろうと、その姿がすぐに思い浮かんだということ。
- 5 タマコさんの部屋にあったポスターがモランデイの作品であったことに、マサエさんのメールによって気づいたと思わずつぶやいたということ。

問七 傍線d「とてつもなく個性的だと認めざるを得ない」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、解答欄の番号をマークしなさい。解答番号は 。

- 1 特徴のない絵であるからこそ、万人に気に入られ、多くのファンに支持されている点で独特だということ。
- 2 淡々とした絵ではあるが、ささやかなものが「在る」という現象がしっかりと描かれており、人の目を引くということ。
- 3 小さくまとまった絵であり、どれも似ているようであるが、少しずつどこかが違うという特殊性が際立っているということ。
- 4 地味な絵ではあるが、同じモチーフ・同じ構図を繰り返し描き続けるという画家の行為自体が他に例を見ないということ。
- 5 心地のよい絵ではあるが、どこか取るに足りない欠けたところがあるように感じさせ、その不完全さに圧倒されるということ。

問八 に入る文として最も適当なものを、次の中から一つ選び、解答欄の番号をマークしなさい。解答番号は 。

- 1 | なんとということもない静物画。
- 2 | 独自のあざやかな色彩表現とモダニテイ。
- 3 | ちよつとずつどこか違う。
- 4 | 元氣いっぱい、にぎやか。
- 5 | あらゆる流派を包みこんでしまう。

問九 傍線 e 「まったくもう、タマコちゃんたら……と、ほんのり涙ぐんで、笑っていた」とあるが、このときのマサエさんの心情の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、解答欄の番号をマークしなさい。解答番号は 24。

- 1 タマコさんが誰にも言わずに学芸員資格を取得していたことに驚くと同時に、病と闘いながらも自分の夢をかなえていたことに感動し、昔からの友人である彼女の頑張りにしみじみとした思いを抱いている。
- 2 タマコさんのアミへの最期の言葉が学芸員資格を取得していたと伝える内容であったと聞いて、大学時代の友人である彼女の昔の元気な頃の姿が思い出され、懐かしさを感じている。
- 3 タマコさんの学芸員資格を取得したという発言だけでも驚くに値するのに、さらにそれが最期の言葉だったと聞かされあきれつつも、彼女らしさあふれるエピソードだと思い、温かい気持ちになっている。
- 4 タマコさんが冗談のような素早さで行動を起こし、学芸員資格をすでに取得していたことに驚き、それが体に無理をさせたであろうことに憤慨しつつも、彼女のバイタリテイを非常に誇らしく思っている。
- 5 タマコさんが誰にも言わずに学芸員資格を取得していたことを知って、死の直前であっても夢を諦めずにいたことに驚きながらも感動し、彼女の生前の元気な姿を目に浮かべている。